慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 序 |
| Sub Title | Preface |
| Author | 大串, 尚代(Ōgushi, Hisayo) |
| Publisher | 慶應義塾大学藝文学会 |
| Publication year | 2020 |
| Jtitle | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.1- 3 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 巽孝之教授退任記念論文集 |
| Genre | Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 序

## 大串　尚代

三田の西校舎の大教室で開催された英米文学専攻の研究会説明会で、わたくしが初めて実物の巽先生を拝見したのは、1990年の秋の事だった。

当時の英米文学専攻において、研究会（ゼミ）を担当されていたのは、英語学・言語学分野では岩崎春雄先生と唐須教光先生、イギリス文学分野では安東伸介先生、髙宮利行先生、河内恵子先生、山田隆一先生だった。そしてアメリカ文学分野では、現在よりもおひとり多く、3名の先生が研究会を担当されていた。おひとりは、メルヴィルやソローをはじめとするアメリカン・ルネサンス文学がご専門の山本晶先生、もうおひとりは、理工学部教授でジョン・アーヴィングなどの現代アメリカ小説の翻訳者として広く知られていた中野圭二先生、そして法学部から文学部に移籍されて間もない巽孝之先生である。

いずれの先生も当時学部生のわたくしにとっては――もちろん今でもだが――雲の上の存在であり、どのような研究会なのかといったことを気軽に質問に行くことなど、とてもできるような雰囲気には思われなかった。高校時代よりアメリカ文学を研究することを志していたわたくしは、研究会の志望時にずいぶん頭をなやませていた。そんな折に、たまたま、原典講読（現在の英語英米文学基礎講読）でご担当いただいていた河内恵子先生と研究会について話す機会があったのだが、その際に河内先生がおっしゃった一言はいまでもよく覚えている。「巽先生は、すごく切れる人。新進気鋭の研究者よ。それだけに巽先生は、お厳しいわよ」。

当時2年生が履修する必修科目を巽先生は担当されていなかったので、講義を受ける機会はなかったものの、しかしわたくしは『ユリイカ』『マリ・クレール』

や『エスクァイア日本版』などの雑誌に掲載されていた最新のアメリカ文学に関する記事を通じて、「巽孝之」という存在を知っていた。そこには、まだ日本でほとんど知られていない最先端のアメリカ文学や文化の情報や、新しいムーヴメントが軽やかに紹介されていた。アメリカって面白い国だ。そう思わせるような文章の勢いが記憶に残っている。厳しさと軽やかさの取り合わせに導かれ、その翌年から在籍した巽研究会でわたくしの研究歴が始まったのだった。

そこからあっという間に30年の月日が流れた。この間、巽先生がなされてきたご研究の数々によって、本邦の英米文学研究のレベルが国際的な水準にまで高まったことは、言うまでもないことだろう。巽先生の研究分野を説明することは困難を極める。狭い意味では、博士号請求論文や著書『E. A. ポウを読む』からわかるとおり、アメリカン・ルネサンス期のアメリカ文学、と言えるだろう。しかし、巽先生の研究は、一時代あるいは一作家の研究におさまるものではない。本塾の福澤賞を受賞された『ニュー・アメリカニズム』から近著『パラノイドの帝国』にわたる日本語での研究書の数々、またデューク大学出版会から刊行された英文単著*Full Metal Apache*や*PMLA*、*Critique, Paradoxa, Narrative, the Journal of the Fantastic in the Arts*など主導的学術誌に発表された数々の英語論文によって、塾内外および国内外の研究者たちに、アメリカ研究がいかに知的刺激に満ちたものになりうるかを披露してきた。さらには『日本変流文学』では寺山修司論や笙野頼子論を含む現代日本文学研究を、『現代SFのレトリック』ではSFというジャンルのさらなる可能性を、そして『メタファーはなぜ殺される』『盗まれた廃墟』では、現代批評理論と文学とのスリリングな共犯関係を示してこられた。それだけではない。映画、音楽、美術の領域にも、巽先生は軽やかに分け入っていく。

巽先生の研究の軽やかさはまた、学問や研究に対する真摯な姿勢と隣り合わせにある。その真摯さはときに厳しさとしてあらわされる。河内先生のお言葉どおり、巽先生のご指導がときに厳しいものであったことは間違いない。しかしその厳しさは相手をひとりの研究者として見て下さっていることを意味していた。論文執筆、学会発表、講演を途切れることなくこなされ、あれほどのお忙しさの中にあっても、巽先生は研究に関する助言を求める人に対して、時間を惜しまれることは決してなかった。

したがって、巽先生の学恩を受けた人々の数ははかりしれない。またその学恩

に報いることはとてもかなわぬことのように思われる。ここに巽先生の退職を記念した『藝文研究』に集まった論考には、それぞれの執筆者から見た「アメリカ」が論じられている。それは、巽孝之先生の学恩に対するせめてもの感謝のしるしである。